

## 2025年12月14日 待降節第3主日 マタイ 11:2-11「何を見たのか」北川逸英師

今日の主日は、カトリック教会では「ガウデーテ主日」と呼ばれています。「ガウデーテ」とはラテン語で、「喜びなさい」という意味です。待降節はふつう、悔い改めて心を静かに整える季節です。でも、この第三主日だけは、少し雰囲気が変わります。司祭は濃い紫ではなく、柔らかな薔薇色の祭服を着て、アドベントクランツの三本目のロウソクにも、同じ薔薇色の火が灯されます。

それは、まだクリスマスは来ていないのに、「もう喜びは始まっている。主は近づいておられる」ということを、目に見える形で思い出させるしるしです。悔い改めの季節のただ中で、教会はあえて「喜べ」と命じます。「いつも主にあって喜びなさい。重ねて言う、喜びなさい」という呼びかけが、世界中の礼拝の中で響いているのです。

けれど、私たちは知っています。現実の世界は、決して「喜びやすい」状況ばかりではありません。戦争のニュース、災害、病気、孤独、そして拘禁=人が閉じ込められ、自由を奪われること。喜びどころか、希望の火さえ消えそうになる現実が、いくつもあります。それでも教会は、今日、「ガウデーテ」、つまり「喜びなさい」と宣言します。悲しみや不安のただ中で、あえて主を賛美し、希望の火を消さずに燃やし続けなさい。それが、ガウデーテ主日に込められたメッセージです。

そのことを、今日の福音書は深いところで物語っています。マタイは、拘禁状態がどれほど人の心を傷つけ、壊す暴力であるかを、私たちにはっきりと伝えています。今、洗礼者ヨハネの心に「疑い」が生まれます。あれほど熱烈にイエスさまの到来を待ち望み、「自分など足元にも及ばない、はるかに素晴らしい方だ」と主をほめたたえていたヨハネが、牢獄に繋がれると、不安で心が揺れ始めるのです。そこでヨハネは、獄中から自分の弟子たちにこう頼みます。「主のもとに行って、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねして、確かめてきてくれ。」

洗礼者ヨハネは、自分が「真の救い主がこの世に来られるための道を備える役目」を与えられて生まれてきたことを知っていました。ずっと、それを信じて生きてきました。でも今、自分の後に来れる方が、本当にイエスさまなのかどうか分からなくなってしまったのです。拘禁という暴力は、身体の自由だけでなく、心の確かさ、信頼、尊厳を根こそぎ奪います。

人は危機的な状況になると、まず「これは悪い夢だ」と、起こった出来事そのものを否定しようとします。それを過ぎると、深い落ち込みにおちいり、それまで信じていたことにまで疑いを持ち始めます。「どうしてこんなことが起きたのだろう。」その原因を必死に探そうとします。

しかしヨハネは、今回の逮捕が、自分の言動によることは分かっていました。ただ一つ、どうしても気になっていたのは、「自分は与えられた務めを果たしただろうか。自分の見てきたものは、本当に正しかったのだろうか」ということでした。

暗闇の牢獄の中で、ヨハネの心には、喜びではなく、不安と疑問が渦巻いていたことでしょう。ガウデーテ主日の「喜びなさい」という呼びかけから、一番遠い場所にいるように見えます。しかし、主はまさにその場所に、喜びのしるしを送り届けてくださるのです。

そんなヨハネに対して、イエスさまは弟子たちに言づてを託されます。「目の見えない人は見えるようになり、足の不自由な人は歩けるようになり、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」

これらの出来事は、ヨハネが獄中でうわさとして聞いていた、イエスさまの奇跡の数々です。イエスさまは、「それは実際にわたしの行ったことだ」と静かに、しかしあつまかにと示されました。これこそがヨハネが聞いたかった、「救い主がこの世に来られた」という証拠でした。同時に、イエスさまはこうも語られます。「貧しい人に福音が告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」

聖霊のお働きがなければ、福音を語ることはできません。ヨハネもまた、聖霊に満たされて荒れ野に立ち、ヨルダン川で悔い改めを語り、洗礼を授けてきました。イエスさまは、ヨハネにこう言っておられるのだと思います。「あなたが荒れ野で語っていた福音、悔い改めを呼びかけていたその言葉、それもまた、同じ神の力の現れなのだ。幸いな人ヨハネよ。あなたは大丈夫。決して倒れることはない。」

このイエスさまの言葉を聞いて、どれほどヨハネの心は、喜びと慰めに満たされたことでしょう。たとえ牢獄から出ることができなくとも、すでに事は成されました。救いは与えられました。ヨハネの生きてきた歩みは、ただ空しく終わったのではありませんでした。牢獄の冷たさは変わらなくても、その暗闇の中に、ガウデーテの喜びの火がともったのです。状況が変わらなくても心の中で「主を喜ぶ」ことは、誰にも奪うことはできません。

ここでイエスさまは、ヨハネだけでなく、周りの群衆にも目を向けられます。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら、王宮にいる。」

これは、私たちがどれほど「本当の姿」を見ようとしないかを、イエスさまが指摘しておられる言葉です。人々は確かに、ヨハネを見に荒れ野へ行きました。しかし、本当に「神さまの言葉」「悔い改めへの招き」を見ていたでしょうか。それとも、「すごい預言者がいるらしい」「権力者をきびしく批判する、派手な人がいるらしい」と、見ものを見に行くだけだったでしょうか。

イエスさまは、私たちの目がどれほど簡単に、「見た目」「強さ」「派手さ」に引きつけられ、真実からそれてしまうかをご存じです。柔らかな服、華やかな人、分かりやすく力強い「ヒーロー」を求めて、人は心躍らせます。しかし、神さまはしばしば、その反対のところにおられます。荒れ野に立

つ、粗末な衣を着たひとりの預言者の叫びの中に。牢獄の暗闇で揺れながら祈る、ひとりの信仰者の中に。

「何を見に荒れ野に行ったのか。」このイエスさまの問いは、今日の私たちにも向けられています。「あなたがたは、何を見るために礼拝に来るのか。何を求めて、ここに座っているのか。」

私たちは今、本当に目を開いて世界を見ようとしているでしょうか。自分の望むものだけを、何もないところに浮かび上がらせて、それを「真実」だと思い込んではいないでしょうか。私たちの心の中には、「自分の願い」「自分の不安」「自分の怒り」「自分の価値観」が、自動的にピントを合わせるレンズのように張りついていて、「見たいものだけを見る」「見たくないものは見えないようにする」という働きをしています。その結果、世界は「自分にとって都合がよく、便利で快適なモノ」になってしまいます。

でも、そのような世界の中にも、主の喜びのしるしは確かにあります。重い病を抱えながら立ち上った人、耳の聞こえない人、多くの困難を背負いながらも、そこから歩き出した人たち、絶望の底から「よみがえられた」ような体験をした人たちがいます。愛する人を失っても、なお立ち上がって、再び希望を語り始める人がいます。その一人ひとりの背後に、イエスさまのまなざしと、静かな御手があります。

それなのに、自分にとって不都合なこと、見たくない現実を、私たちは見過ごします。そうなると、神さまが今、本当に見せたいと思っておられる「すでに始まっている御国のしるし」を、私たちは見落としてしまいます。

本当の問題は、「神さまが働いておられない」ことではありません。「私たちの目が、それを見ようとしていない」ことではないでしょうか。悔い改めとは、単に「悪いことをやめる」ことではなく、「自分の目は完全ではない」「自分の見方は偏っているかもしれない」と認めることです。「自分が見ているものがすべてだ」と思って生きてきた歩みから、「自分の願いや恐れに縛られて、真実を見損なっていたかもしれない」と気づくところから、主への向き直りが始まります。

牢の中で心が揺れ動いたヨハネは、その不安の中からイエスさまに助けを求め、問い合わせました。「本当に、あなたが来るべき方ですか。」この問い合わせこそが、信仰の行為です。不安と疑いのただ中から、それでもイエスさまに向かって問い合わせ続けたからです。そのときヨハネは、主の言葉によって、「自分の見てきたものは間違っていなかった」と知らされました。

そこには、ガウデーテ主日のメッセージそのものがあります。状況は暗く、希望はゆらいでいても、「それでも主を見上げ、主を喜ぶ」ことへと招かれているのです。

今日のタイトルは「何を見たのか」です。私たちは今、何を見て生きているでしょうか。そして今日、この礼拝から帰ると、「主の憐れみと、そのしるしを見た」と言えるでしょうか。拘禁という、人

を壊す暴力のただ中にも、世界に満ちる不安と暴力のただ中にも、なお働いておられるイエスさまの恵みのしるしを、ご一緒にもう一度見つめ直したいと思います。

たとえ自分の人生が「牢獄」のように感じられる時があっても、そのただ中で、主を賛美し、希望の火を消さずに燃やし続ける者でありたいと願います。私たちの曇った目が、悔い改めによって洗い清められ、イエスさまの十字架と復活、そして今も働いておられる聖霊のお働きを、新しく「見る」目へと変えられますように。

主が、私たち一人ひとりにも、洗礼者ヨハネに語られたのと同じ、主の愛による慰めと、祝福と、「喜びなさい」という力強い招きの御言葉を、語りかけてくださいますように。アーメン。